

THE CAMPUS MAGAZINE OF TOKYO UNIV.

こう

が

しず

# 恒河沙

230号

特集

よるづかみ

小ネタも  
盛りだくさん!

駒場トライアスロン

時錯スポーツクラブ

宗谷岬に行きたい

学科試験絶対合格法

百人町のきちがいジジイ

ブラ社守第6回

# 特集の歌

よろづがみ

弥生のウエイに

耐えかねて

もとの駒場の

イカ束恋しき

……二頁

2年次になり、心機一転するのには良い季節ですが、あなたは当然学部デビューなどできません。大学デビューにすら失敗したあなたに、今更何ができるというのでしょうか。周囲に集まるのは麻雀と酒と女の事しか眼中になり墮落者どもで、弥生は宛らソドムかゴモラのようにです。あなたはさぞ幻滅なさるでしょうが、実は場違いなのはあなたの方。このまま孤高を気取るのもよいですが、いずれ自分だけでは立ち行かなくなりませよ……？

## 運 勢

## 小 ね 夕

暴食

駒場トライアスロン

……三八頁

運動

時錯スポーツクラブ

……四六頁

服装

私のライフスタイル

……五〇頁

旅行

宗谷岬に行きたい

……五二頁

勉学

運転免許学科試験

絶対合格法 ……五八頁

待人

百人町のきちがい

ジジイ ……六三頁

散歩

ブラ社守第6回

……七〇頁

時代錯誤社



四穀豊満

時代錯誤社

# びんぼうがみ 文責【黄色が好き】

世界一貧しい国、日本。昨今の日本の経済低迷は、世界一ともいわれる日本人の心の貧しさと緊密に結びついている。そしてそれは、モラトリアムを謳歌しているはずの大学生の知と心の豊かさにまでも影を落とし始めている。心が貧しい筆者による、他大生の実態調査記録。

心が貧しい東大生

私は私文が嫌いだ。といっても、世の中の私立文系学生一人ひとりが嫌いなのではない。当然文系学生にも学問に真摯に向き合っている者も、明確な将来像のために努力している者も多く存在し、彼らのことはむしろ好ましく思っている。私が真に嫌うのは有名私立大学の、遊んでばかりいるくせに自分たちを高学歴だと勘違いしているようなキラキラした奴らだ。入学難易度や学力のわりにブランド力だけはやたらと強く、大学名を出すだけで世間からは「頭いい」なんて言われる。そんな奴らが評価される世の中で日本の将来は大丈夫なのか。このあたりで一回、彼らの悲惨な現状を世間に知らしめてやった方がいいのではないだろうか。

ということ、いかにも勘違いキラキラ私文学生が多そうな上智大学、慶應義塾大学、青山学院大学に赴きその実態を調査することにした。お札や本をキャンパス内の道端に落とし、彼らが拾うのかどうかを観察する。わざわざ「森の夜」と休日を返上して行くんだから、自称高学歴の彼らの賢明な判断に期待したい。

## ①慶應義塾大学

早稲田と並ぶ私学最高峰、慶應。しかし早稲田よりも陽キャ度が高い印象があるので今回の最初のターゲットとして選ばれた。今回は3姉1弟の4P小説『あねスポッ!』と、千円札を落として塾生の反応を観察する。まずは「あねスポッ!」から。



▲さあ引っかかれ、慶應義塾生!



▲『あねスポッ!』の表紙。筆者が一番右の夏雪ちゃん推しです。

……おかしい。誰も拾っていかない。五分も待てば金髪のチャラ男が拾っていき、そいつに突撃、無事に塾生のふがいない実態が明らかになった、めでたしめでたし。のはずだった。しかし通行人はごくわずかで、十分ほど待っても誰一人として拾う素振りすら見せない。休日に来るほど勉強熱心な学生は慶應義塾大学からは絶滅してしまったのだろうか。そう心配をしていると、一人の学生が通りかかった。眼鏡に片手に持ったスマホ、そして重そうな足取り。いかにも東大にいそうなやつだ。興味ありげに地面に落ちた本を見ている。さあ、拾ってくれ。そして、塾生の実態を証明してくれ。



▲彼は結局拾っていかなかった。

五秒ほどその場で立ちすくんだ後、彼は去っていった。

やはり慶應義塾生は性的に満ち足りているのだろうか。外見はイカ東でも、しれつと彼女がいたりするのだろうか。三次元的に満たされている彼女らにとっては、二次元の魅力など眼中にないのだろうか。いづれにせよ、エロ本程度では塾生の高学歴(笑)としてのプライドを揺るがすことは出来なかったようだ。

続いて千円札を道の真ん中に落としてみる。人通りの少ない道に千円もの大金が落ちていたら、流石の彼らもその心の卑劣な一面を覗かせてくれるはず。



▲今度こそ引っかかれ、慶應義塾生！

……だった。そこにあるのは、誰の目にも止まることなくかすかに風になびく、英世の

悲しげな表情。そしてそれを道に落ちているイチヨウの葉と同じように跨いで通り過ぎていく、見るからに上流階級のお嬢たち。彼女たちにとっては、創造主である福沢諭吉以外は落ち葉にしか見えないのだろうか。誰にも見向きもされない英世があまりにも哀れで、これ以上見ていると我々の心に残り症が残るうだったのでここで終了ということにした。

残るは最終手段。こちらから突撃して、この手で奴らのペールを覆い取ってやるしかない。辺りを見回すと、茶色寄りの金髪でガタイの良い、いかにも慶應の陽キャラ男がいたので取り敢えず突撃する。自尊心を引き出して気持ちよく喋ってもらうため、敢えて明大生を装って声をかける。

「すいませーん、塾生の方ですか？」

「はい。」

「僕たち明治大学の学生で、今塾生の生活を調査してるんですけど、ちょっとお時間良いですか？」

「あ、はい。」

「じゃあ、まず学部とか教えて貰えますか？」  
「経済学部です。」



## プロローグ

夏も終わりに差し掛かり、今年もこの季節がやってきた——駒場トリアスロン。それはここ駒場に代々受け継がれた神聖な競技、儀式である。自らの胃袋の限界を超え続けることで、どんな逆境も乗り越え、留まることを知らない存在になることができる。時に吐瀉物のイニシエーションにより己の闇と向き合うことで、初めて他者に対して慈愛の精神を向けることができる。駒場の守り神により認められた一人前の社員を育て上げるために、長年登竜門企画として君臨し続けてきた。

ルールは至ってシンプル。駒場が誇るデカ盛りメニューを、3つ完全に平らげることでのみゴールでき、そのタイムを競うというものである。どこのメニューが選ばれるかは毎年変わるが、その過酷さは年々進化し続けると聞く。もちろんどうしてもキツイ場合は途中でリタイアすることもできるが、敬虔な信徒たる我々が神に背く真似など出来ようがなからう。「食えない言い訳を探すくらいなら、少しでも食える方法を探せ。」我々は、店側に迷惑をかけない限りどんな手段も辞さない。9月3日、新たな神の承認を巡る闘争に火蓋が切って落とされ、今年も地獄の祭典が幕を開ける。

文責【書き人知らず】

## 生贄紹介

今回もこの伝統を絶やさぬべく、3名の勇敢な1年生社員が名乗りを上げ、いざ神の前に生贄として差し出された。エントリー順に紹介しよう。



【恥曝し】  
身長：171cm  
体重：54kg



【びじゅつ】  
身長：163cm  
体重：53kg



【書き人知らず】  
身長：171cm  
体重：81kg

やはり注目は【書き人知らず】。挑戦者の中で一番の巨体の持ち主であり、体重では他2人を30kg近く上回る。当然胃の容量もそれに比例して大きいはずであり、優勝候補NO・1だ。

また【びじゅつ】も侮ることができない。3人の中で唯一の運動部員であり、何度も挫けそうになっても諦めずに挑み続けるリバウンドメンタリティーに期待だ。陸上部で培った持久力を頼りに、ぜひこのレースでも「完走」を目指してもらいたい。

そして今回の挑戦者の中で一番のダークホースとなり得るのが【恥曝し】だ。脱コロナ時代において唯一マスクを身に着けた男は、怪しげな服を身にまとい全てが謎に包まれている。そもそも今までのトライアスロンでは、ただでさえ身体的な苦痛を伴うのだから精神的には楽にという配慮から、参加者は皆私服での参加が普通であった。それを今年、いきなりプリキユアのコスプレ姿で決戦の場に現れ、【書き人知らず】にも黒猫のコスプレを着るよう仕向けてきたのがこの男だ。何か秘策があるに違いない。ただでさえ満腹にする企画だと言うのに、登場早々「朝飯をたっぷり食べてきた」という様子からも、何かタダモノではない気配を感じさせる。

戦いを前に、3人それぞれに意気込みを聞いた。



▲いったいこの内の何名が生存することができるのか……

【書き人知らず】「最近便秘気味なので、たくさん食べて腸の中のブツを押し出して、またそこに食べ物を詰め込んでいこうと思います。」

【びじゅつ】「味を気にせず無心で食べまくるという戦法で行くつもりです。完走目指して頑張ります！」

【恥曝し】「最近プリキユアの格好で幼女と戯れようとするおっさんがいるらしいです。朕を見習え！」

以上が今回神の前に差し出された生贄たちである。彼らがそれぞれどんな「走り」を見せ、神への忠誠心を見せるのだろうか、とても楽しみだ。では早速、レースの行方を見守ることにしよう。

### 文責【駒場トライアスロン実行委員会総書記】

## 第一種目

さあ今年も始まりました！ 駒場トライアスロン。ここから実況は私【駒場トライアスロン実行委員会委員長】、解説は【松木高太郎】（以下

【松】）の2人でお届けしていきたいと思えます。

おっと？ 試合前に3人がなにやら相談しています。どうやら何も考えずに日曜の午後集合にしてしまったあまり、過去のトライアスロン企画でお世話になったお店が軒並み閉まっているとのことです！ なんて阿呆なんでしょう！

（30分後） ここで3人がようやく動き始めました！ どうやら1軒目の見当が付いたようです。

【松】「いやあーこの人たちね、アスリート気取りしてますけど傍から見れば完全に不審者ですからね。どうかかしてしてますよ笑。特にコスプレしてる2人！」

松木さんも言いますねえ。ただ普段から生協前で恥を晒している彼らには効かない言葉でしょう。さて、そんな3人が辿り着いたのは……





夏休みの最終週、どうしても宗谷岬に行きたかったので初ゼミで知り合った不良の女とヒッチハイクをしてきた。こいつとは2人で遊んだことがなく学校外で会ったことすらない、ただ学生会館でファーストピアスを開けてやっただけの仲間だった。

## 1 目 目 目

開始地点は埼玉の蓮田駅から半時間ほど歩いた所にある蓮田サービスエリアにすることになっていたので、一般道に繋がる出入り口がなく、やむなく柵を越えて侵入した。20分ほど経つとビジネスマンらしきドライバーが声をかけてくれた。彼が案内してくれたワゴン車の後部座席には、白い装束に身を包んだユダヤ系の人が三人乗っていた。そのうちの一人はユダヤ教の派閥の権威であり、日本を拠点として活動しているかなり偉い人とのことだった。声をかけてくれた男性は京大の熊野寮の出身で、コーシヤというイスラーム教というハラール食品の認定などを行う事業をしているらしい。途中からいきなり雨足が強まってきて不安になってきたのだが、那須高原サービスエリアで別の車に乗り継ぎ、午前中には福島県の安積パーキングエリアまでたどり着くことができた。



▲一目見ただけでユダヤ教の権威と分かる。

そこでスケッチブックを掲げた瞬間、ニコニコしながらひどい東北訛りで「お腹空いてるでしょ!？」と言って飯を奢ってくれたおじさんがいた。これから仕事の会合に向かうというこの人に、岩手まで乗せていってもらうことになった。彼のレクサスは速度が124キロを超えたらギャンギャンとサイレンが鳴る仕様となっており、断末魔のようなその音が道中ずっと絶えなかった。この人はスピード狂に加えてヘビースモーカーでもあり運転中でさえ煙を切らさなかったが、もらった彼の名刺には某企業の取締役と書いてあった。なんと、駒場の生協食堂のキッチンの設計を担当したこともあるのだという。この人は自己紹介もそこそこに、ずっと一人娘の惚気話をしていた。娘さんは社長令嬢にしては民度が低めなようで、周りにはホストに入れあげたり水商売に足を踏み入れたりしているご友人が多いらしく、彼女がそ





▲ここで無くなったバイクがカナダで見つかったことがあるらしい。

ういうものに手を出さないと彼は月に30万も小遣いをあげてしまっているらしい。また、「パパと一緒に暮らしていると私ダメになりそう」という殺し文句でもって娘が探してきたタワーマンションの一室(月10万)に彼女を住まわせてやり、生活費も全て工面してやっているとのこと。娘を「パパ活並みに甘やかしている」、と彼は自虐していた。とはいえ関係は非常に良好で何でもオープンにできる仲であり、高校時代には娘さんの彼氏を定期的に食事に招き、その顔からコトウゲというあだ名をつけて娘共々可愛がっていたのだという。まあ最終的には彼女との距離感にバグを起してストーカーみたいになってしまったらしいのだが。

おじさんはわざわざ途中で停車し、陸前高田の海を見せてくれた。ここは12年前、10メートルの堤防を優に超える津波に襲われたのだという。

我々は彼に何かしてもらおうたびに思わず「やったー」と叫び散らかしていたのだが、おじさんはその度に「娘みたいな喜び方する!」とはしゃいで、色々お世話してくれた。挙げ句の果てにはなんと、「(彼が泊まるホテルに)追加で部屋取ろうか?」とまで言ってもらってしまった。流石にそれは申し訳ないし、それに猶予は4、5日間しかないのが夜通し進むべきところをここで止まってしまうのはあまり宜しくない、と伝えたのだが、もう少し3人でおしゃべりがしたいだけなのだと逆に頼まれてしまった。まあ正直ここまでいい思いをさせてもらったことはかつてなかったし、彼も非常に好ましい方だったので、その申し出に甘えさせていただくということになった。夜と朝のバイキングに加え、晩酌までさせてもらった。ヒッチハイクをしていて年配の男性などに過度にお世話になってしまうと、自分は無自覚に性を切り売りしているのではないかと気になる瞬間が度々あり、自分がやっていることって実際パパ活だよなあ、と申し訳なく思い落ち込むことがない訳じゃないのだが、このおじさんは「本当にうちの娘みたいだよなあ、これもパパ活みたいだよなあ」と笑い飛ばしてくれて、なんとなく救われたような気がしてしまった。

夕飯をおじさんと一緒に食べたとき、彼は



▲「根性焼きしていい?」と言っていきなり私の踵に煙草を押し付けてきた。

ちよつと酔っていたのか、「政治とか興味ない? 今の世の中には君たちみたいに冒険できる人材が必要なんだ。日本の未来を担ってくれ」みたいなことを我々に延々と言ってきた。不良女に対しては「男勝りだねえ。うちの会社継いでくれない?」と真顔でよりリアルな申し出をしていた。

ホテルはこれ以上ないというほどに快適だった。野宿を想定していただけに、人並みに立派な部屋を与えてもらってテンションが上がった。不良女は、はしゃぐあまり「プロレスっこしゅう」と言い始めたのでどうにも焦った。

## 2日目

翌朝、おじさんに宮古警察署で降ろしてもらった。ひとまず高速に乗りたかったのだが、近くの高速には料金所がなかった。一般道との境目がよくわからずふらふら前進していたら、パトカーがやってきて目の前に止まった。気づいたら**高速道路に徒歩で侵入**してしまっていたらしい。その場で職質され、ちよつとボールペン貸してねと言われたので貸したのだが、ノートに学生証の情報を細々と書き写していく警官の姿がアナログすぎた。なんだか笑ってしまった。彼は雨にノートが濡れることも気にせず熱心に私の生年月日なんかを書きとっていたのだが、この件は彼の管轄外だったようで、すぐに高速隊の人たちがやって来た。ちなみに**ボールペンはそのまま返ってこなかった**。



▲学生証を見せたら明らかに態度が変わった。

そして彼らが乗ってきたパトカーに乗せられたのだが、我々の処罰について聞いたら「一応不法入罪に当たるけど、まあ**嚴重注意かなあ**」というゆるふわな返コメントが返ってきた。ボールペンを奪われた旨を話してみたら、「これでチャラにしてよ」と別のペンをもらった。初パトカーにデションが上がったのか、不良女は「都道府県**嚴重注意の旅**とかしたいね」とほざいていたのだが、10分ほど走った後、海岸にぼつんと立った道の駅的な所に降ろされた。「**ヒッチハイクはここでしときなさい**」とのこと。車通りは明らかに少なかつた。ここは**トイレ**もあるからね、きつと乗せてくれる人が現れるよ、なんせ**トイレ**があるからね、とよくわからないフォローを何度も入れてきたのだが、岩手では**トイレ**がそんなに重要なカードなのだろうか。手当たり次第声をかけていったものの乗せてくれる人は見つからず、これならばさっきの高速の手前で立っておくんだつたと途方に暮れた。スムーズだった昨日のことを考えれば、これが初めての挫折だった。

北海道に行けるかどうかすらわからなくなってきたので、仕方なく青森へと向かう高速の入り口付近までは電車を使うはめになった。だがここでも車が全然見つからず、何分体力がゴミなので疲労感が頭が朦朧としてきた。



▲2人でしりとりを続けることで正気を保っている状態である。

しかし時間半ほどすると優しいような女性が現れ、その方に乗せてもらった。娘と一緒に**デイズニー**に行くような可愛らしいお母さんで、八戸の**フェリー**港にまで直接連れて行ってくれた。

トラックを北海道まで運ぶ**フェリー**があるからそれに紛れ込めばいい、と初日のおじさんに教えてもらったのだが、八戸港で**トラック**ドライバーを捕まえるのは至難の業だったので、**フェリー**の中で運転手を探すことにした。

## 3日目

だが**フェリー**の中にいたのは自衛隊体育学校の合宿か何かなのか、全身迷彩に坊主頭の連中ばかりだった。ちよつと怖かったので、声をかけるの